「勘違いしないでよね！
アンタの事なんか
大好きなんだから！」
呪いで本音しか言えなくなった
ツンデレお嬢様
立ち読み版
上田ながの
挿絵◎SAIPACo.

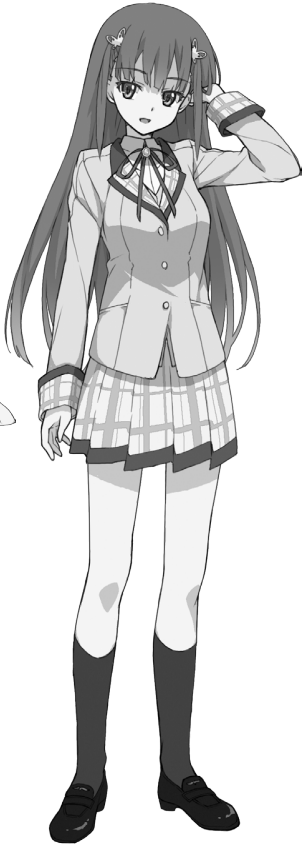
序章　私……婚約することになったの　006
一章　私……あんたのことなんか……だ、大好きなんだから!!　017
二章　あんたとエッチ……し、してあげるんだから！　056
三章　そんなにしたいなら……させてあげるわよっ!!　ていうか、してよね！　102
四章　私……凄く幸せなんだからね！　146
五章　私もあんたのこと……好きに決まってるじゃないっ!!　201
終章　ずっと一緒なんだからね！　222

登場人物紹介

Characters

天王寺穂乃花（てんのうじほのか）

名家天王寺家の眉目秀麗なお嬢様。悠とは幼少の頃から家族ぐるみで付き合いのある幼馴染みの関係。なぜか彼に対しては常にきつい態度で接してしまう。



鬼巫女（おにみこ）さま

鬼巫女神社に封じられている神様。人々の願い事を叶えてくれると伝えられている。

松橋悠（まつはしゆう）

ごく一般的な家庭に生まれた平凡な学生少年。幼馴染みである穂乃花に密かに思いを寄せている。

どこにいる相手なのかも分からないけれど、心の中で反論する。
『誰？　さっき主自身が言ったであろう？　ワシは鬼巫女さまじゃよ』
（鬼巫女さまって……。あんた！　こ、これどういうことよ！　どうなってるの？　なんで私が思ってることを口にできないのよ！　というか、思ってることと正反対の言葉を口にさせるのよ！　これ……あんたの仕業なんでしょ!?）
敵意を剥き出しにして問う。
『あんたあんたって……仮にもワシはこの神社に封じられた神じゃぞ。しかも、ワシは主の願いを叶えてやったというに……。もう少し言い方ってもんがあるかと思うがのう』
これに対して鬼巫女さまは不満そうな呟きを返してきた。
（願いを叶えた？　これで!?　馬鹿なこと言うんじゃないわよっ！　思ってもないことを口にさせる――そんなこと私は願ってないわよっ!!）
自分が願ったのはあくまでも婚約話をどうにかして欲しいというものである。それなのに何故こうなる？
『いやいや、これは主が願ったことじゃよ。ワシは主が婚約を破棄できるように素直にさせてやったのじゃ』
（す……素直？）
一体どういうことだろうか？
『つまりのう。嘘をつけなくしたのじゃよ。何を言うにも本音。本当のことしか口にでき

ないようにしてやったのじゃ』

（――んなっ⁉）

一瞬頭の中が真っ白になる。

本音しか話せない？　嘘がつけない？

（う……嘘つかないでよっ！　本音って……それじゃあまるで私が本気で悠に対して感謝しちゃってるみたいじゃない！　悠なんかに心配されて喜んじゃってるってことじゃない！　私は……私はそんなことないのに……）

あり得ない。そのようなことあるはずがない。

大体、心の中では何度も悠の言葉を否定しているのに……。

『くくく、心の表層で思っていることは真実ではない。本当の心というものは自分でも分からないところにあるんじゃよ。自分でも気付かぬほど深い場所にある本当の気持ち。それが本音という奴じゃ。それしか主は口にできん。そして、行動もそれに準ずる。身体も本当に心が欲してるようにしか動かぬ。とはいえ、安心するがよい。主が嘘をつけぬ相手はほれ、そこにいる男子――悠とかいったか？　そやつに限定してあるからのう。人は本音のみでは生きていけぬからな。とはいえ、その悠に関することであれば、第三者に対しても効果は発動するがのう』

誰に対してでも本音でしか行動できないというわけではないらしい。

だからといって、よりにもよって悠にだけ本音でしか語れなく、本音でしか行動できな

くなる？

（違う！　本音なんかじゃない！　悠に心配されて喜んだりなんか私はしないわよっ！　ぜぜぜ、絶対に‼　というか第一、それがどうして婚約破棄に繋がるのよっ‼）

仮に（あくまでも〝仮〟に）鬼巫女が言うことが事実だとしても、悠に対して本音でしか語れなくなることと、婚約破棄は繋がらないではないか。婚約破棄は先方と父に伝えなければならないことなのに……。

『まぁ疑問はもっともじゃが、本音で語ることに慣れればそのうち誰に対してでも素直になれる。特に一番本音で向き合えない相手に対して素直になることができればのう。というワケで、自分で婚約破棄を伝えられるようになるまで……しっかり精進するんじゃぞ』

（し……精進するんじゃぞって……なによその言い方！　まるでもう時間が来たから自分は帰る！　みたいな感じじゃない‼）

まだ話し足りないことがある。というか、この術を解いてもらわねばならない。

『みたいな感じ……ではなく、実際その通りじゃ。くくく、ワシはこれから録り溜めしておいたあにめを観て、れこーだーのえっちでぃーでぃーを軽くせねばならぬからのう。でないと今夜の分を録画できぬのじゃ』

（できぬのじゃって！　あんた……何よその鬼だか神様だかのくせに俗っぽい理由！　待ちなさい‼　待ちなさいよぉおおっ‼）

必死に心の中で引き留めようとする。

『じゃあの』

だが、鬼巫女はこちらの言葉を聞き入れてはくれず――本当にいなくなってしまった。実際姿を見たわけではないのだけれど、何となくそんな確信をすることができた。

つまり、ここからは本当に悠と二人きり？

なんだか血の気が引いていく気がした。

「感謝って……その、まさか穂乃花にそんな風に言ってもらえるなんて嬉しいよ」

もちろん穂乃花のそんな心に悠は気付かない。先程の続きの言葉を向けてくる。結構長く鬼巫女と会話していたように感じたけれど、どうやら実時間はあまり過ぎていないようだった。これも鬼の力なのだろうか？

なんてことを思考したところで答えを出すことはできない。

仕方ない。ここはまず悠の問いに答えなければ。

（まさかって……なんでそんな言い方なのよ？）

「まさかってなんでそんな言い方なのよ？」

心の声と実際の言葉が一致する。

「いや……だってそれはその……てっきりお、怒られると思ったから……。ほら、僕しつこかったし。そういうのって穂乃花嫌いだろ？」

（当たり前でしょ！　大丈夫だって言ってるのに何度も何度も！　私に対する嫌がらせのつもりなの？　説教に決まってるじゃないっ‼）

心の中ではこう考える。
「別に……き、嫌いじゃないわよ。その……しつこいのは確かに嫌だけど……。でもその……さっきのはあんたが私のことを本気で心配してくれてのことだって分かってるから。だから……怒ったりなんかしないわ」
が、今回は思っていることとはまるで別のことを口に出してしまっていた。
これに対して悠はポカンと口を開ける。
「な……何よその顔……」
「あ……ご、ごめん。だけどその……。え？　ほ、本当に穂乃花？」
「どういう意味よそれ？」
「どうって……だって、なんか穂乃花らしくないから……」
そんなのは当たり前だ。
これはあの鬼巫女とかいう性悪な鬼に妙な術をかけられて、自分の考えていることとはまったく違うことを無理矢理しゃべらされているだけなのだから！
「ま……まぁあんたがそう言うのも分かるわ。いままでの私だったら絶対あんたのこと怒ってたと思う。だけどね、これがその……私のほ……本当の気持ちなの……」
そのことを伝えようとしても、話すことができない。口は勝手に動いてしまう。
「いままではなんていうか……あんたを前にすると……本当のことを言うのが恥ずかしくて……ちょっときつい言い方になっちゃってた……だ、だけなんだからっ!!」

口調自体はいままでとあまり変わりはない。なのに言っていることは正反対になってしまう。

「僕を前にすると恥ずかしくてって……な、なんで？」

「なんでってそれはその……。だから……」

幼馴染みの問いに対して答えを返そうとしてしまう。

（ま……まさか……。だ、駄目！　それは……それは口にしちゃ駄目よ！　そんなことない！　そんなこと私思ってないからっ‼　だから駄目！　口にしちゃ駄目ぇえっ！）

この時、穂乃花は何故かこれから自分が言おうとしている言葉がなんなのか事前に察知することができた。

だから止めようとする。止めようとするのだが、自分の身体なのに自分の意思ではどうすることもできず――

「そんなのき……決まってるじゃない。わ……私は……あんたのことが好きだからよ！」

遂にそれを口に出してしまった。

一瞬静寂が神社の境内を包み込む。

「ほ……穂乃花？」

呆然とした様子でポカンッと幼馴染みは口を開けた。

（あああ！　ちちち、違うっ！　違う違う違う違う違うぅぅぅぅぅ！　いまのは嘘！　嘘なんだから‼　かかか、勘違いするんじゃないわよ！　私があんたを好き？　あり得ない。

そんなことあるはずないんだからぁああっ‼　何言ってるのよ！　私……何言っちゃってるのよぉおっ‼）

とんでもないことを口にしてしまった。

とにかくいまは嘘だと、そんなことないと否定しなければならない。

「……ほ、ホントに？　それ……本気で言ってるの？　本気で僕のことを？　いまの聞き間違いとかじゃなくて？」

もちろん聞き間違いだ。悠のことを好きだなんて自分が言うはずないではないか‼　そう答えなければならない。

そう答えろ！

何度も自分に心の中で言い聞かす。

「聞き間違い？　そ……そんなわけないじゃない」

しかし、否定することはできなかった。

であるのならば期待すべきは次の言葉だ。

「私……あ、あんたのことなんか……あんたのことなんか……」

大嫌いなんだから！

いま言うべきは、大嫌いなんだから、よ！

それ以外の答えなどあり得ない。

あり得ないはずなのに……。

「大好き……。大好きなんだからっ‼」
結局否定することはできなかった。それどころか先程の「好き」以上の言葉「大好き」なんて口に出してしまう。
（あああああ……。なんでよ！　どうしてよっ‼　馬鹿！　私の馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ぁあああ！　こんなこと……どうして口にしちゃうのよぉっ‼）
正直言えばすぐにでもこの場から逃げ出してしまいたかった。
けれども足は動いてくれない。真っ直ぐ悠を見つめてしまう。
先程鬼巫女が口にした通り、どうやら悠に対しては行動にも制限が出てしまっているようだった。
「好きって……ほ、本当に？　本当に僕のことを？」
「さっきから何度も言ってるでしょ！　か……勘違いしないでよね！　あんたのことなんか……ホントに……ホントに大好きなんだからっ‼」
何度も繰り返してしまう。好きだと……。
「ほ……穂乃花……」
告白に対して、悠はいまにも泣き出しそうな表情を浮かべた。瞳を潤ませながら、真っ直ぐこちらを見つめてくる。
そして――
「う……嬉しい。凄く嬉しいよ。僕も……僕もずっと……ずっと前から穂乃花のことが好

きだったから……」
そう気持ちを伝えてきた。
（――え？）
一瞬頭の中が真っ白になる。
好き？　悠が自分のことを？
ドクッドクッドクッ――向けられた告白に、心臓が早鐘を打つのを感じた。なんだかキュンキュンと胸が切なく疼く。
（って……ば、馬鹿っ！　な、何流されてるのよ。悠が私のことを好き？　そんなこと言われて、な……なななな、何喜んでるのよ！　悠は……悠はただの幼馴染みでしょ）
だけど、相手の気持ちはこちらが相手に対して思っている認識とは違って当然だ。だから本当に昔から悠は――。
（だから違う！　私のことを好きだなんて、そんなことないわ。勘違い。こ……こいつ勘違いしてるだけよ。だって……悠ってむむむ……昔から流され易いところがあったから。だから……その……私に好きだなんてう……嘘……そうよ、嘘の告白されて舞い上がっちゃってるだけなのよ！）
無理矢理自分に言い聞かせながら、それは勘違いだと悠にも教えてやらねばならないと考える。
しかし、やはりというかなんというか、それを口に出すことはできず――。

「嬉しい。凄く嬉しいじゃない。それってつまり……私達……り、両想いだったってことよね？」
「う……うん」
緊張した様子で悠は頷く。
「そう……それじゃあ……。わ……私と……つ……つつつ……付き合いなさいよね！」
そんな幼馴染みに対し、遂には交際を求める言葉まで向けてしまった。
「い、いいの？」
「当たり前じゃない！　私達……す、好きあってるんだから！　そうするのがと……ととと、当然でしょ？」
（違う！　そんなの当たり前じゃない！　当然なんかじゃないわよっ‼）
なんてことを心の中で思ったところで後の祭りである。
「それじゃあ……えっと……僕達……き、今日から恋人同士ってこと？」
恋人同士――。
その言葉を聞いた瞬間、全身を電流のようなものが駆け巡るのを感じた。
（恋人？　わ……私と……悠が？）
脳裏に悠と二人で並んで歩く自分の姿が思い浮かぶ。ただ、それだけだったらいつも通りの光景だ。けれど、想像の中の自分はただ幼馴染みと並んで歩いているだけではない。腕を絡め合わせながら、手を繋いでいた。しかもただ手を握りあっているわけではない。

いわゆる恋人繋ぎという奴である。その上、手を繋いで歩くだけでは飽き足らず、やがて二人は互いの身体を抱き締め合い、唇と唇を……。

想像するだけで全身が熱く火照っていく。更に心臓が高鳴っていくのを感じた。

身体はただ熱くなっているわけではない。なんだかポカポカしてくる。悠とデートをしている姿を思い浮かべるだけで、心も身体も満たされていくようなそんな気が――。

（って！　ば――馬鹿っ！　ななな……何を想像してるのよ‼　あ……あああ……あり得ないわ。私が悠と付き合うなんてそんなことあるはずない。私はゆ……悠のことなんか何とも思ってないんだから！　だ、だから……認めちゃ駄目！　恋人同士なんて認められるわけないじゃない‼）

慌てて妄想を振り払う。

「……も、もちろんよ。私達……き、今日から恋人同士なんだから！」

だが、いくら理性を働かせたところで、状況を好転させることなどできなかった。それどころかよりドツボに嵌まっていく。

「だからその……えっと……き……キス。キス……しなさいよねっ！」

やがてはそんなことまで……。

（き……キス？　キスってまさか本当に？　私……え？　嘘……嘘でしょ？　こんな……こんなことって……）

自分が口に出してしまった言葉が信じられなかった。聞き間違いではないのか？　とさ

え思ってしまう。

けれど――

「い、いいの？　本当にき……キスしても？」

現実逃避などしたところで意味はなかった。

（よくないわ。キスなんて……。駄目よ。悠と……悠とキスなんて……）

あってはならないことだ。

そのはずなのに、視線は自然と幼馴染みの唇へと向いてしまう。

男にしては覇気がないまるで女の子みたいな顔だ。そのせいかなんだか唇もとても艶やかで柔らかそうな感じがする。

キス――一体どんな感触なのだろうか？

ファーストキッスは甘い味。なんて話をよく聞くけれど、本当にそんな味がするのだろうか？　などということまで考えてしまう。

ゴクリッ。

口付けを想像し、喉を鳴らしてしまう自分がいた。

（な……何想像してるのよ馬鹿！　いまはこの状況をどうにかする術を考えないと……。でも、あああ……どうすれば……）

事態を好転させる術などさっぱり思い浮かばない。というか、視線を幼馴染みの唇から外すことができない状況では、まともに思考することなどできなかった。

「あ……当たり前でしょ！　わ……私がしろって言ってるんだから……あんたは黙ってキスすればいいの!!　こ……恋人同士なんだからそれくらい普通でしょ！」
結局何も思いつかぬままに、キスを求めてしまう。
「……分かったよ。その……キス……するね」
もうどうすることもできなかった。
宣言と同時に一歩悠はこちらに近づいてくる。
「もも……もっと近づきなさいよ。これじゃあキスするにはまだ遠いわよ」
だが、それでもまだ唇を重ねるには距離があった。
「う……うん」
緊張したような表情を浮かべながら、更に幼馴染みは距離を詰めてきた。
（あああ……近い。これ、凄く近い!!）
すぐ目の前まで幼馴染みが接近してくる。吐息が届くほどの距離であり、なんだかちょっとこそばゆささえ感じた。
「す……好きだよ穂乃花」
それほどの近距離で再び想いを伝えてくる。
（す……好きって……。こここ……こんな近くで好きって……）
脳髄にまで幼馴染みの言葉が染み込んでくるような気がした。なんだか頭の中が蕩けそうな気分になってくる。

だから素直に頷く。
「だったら気にしなくていいわ。だって……その……私……う、嬉しいから……」
「――え？」
最後の方がゴニョゴニョとした感じであまり聞き取れなかった為、思わず聞き返してしまう。
「だ……だから嬉しいって言ってるのよ!!　しっかり聞いておきなさいよね」
結果、怒られることとなってしまった。
「ごめっ――」
反射的に謝ろうとする。
が、言葉の途中で穂乃花の手がこちらの口を塞いできた。
「別に謝る必要なんかないわよ。その……あんたがそういう奴だってことはよく知ってるから……。それぐらい、あんたのこと……私ずっと見てきたんだから。だから気にする必要なんかないからね！」
ずっと見てきた――幼馴染みの言葉が胸に染みる。穂乃花が自分のことを想ってくれていることがよく分かった。その気持ちが嬉しい。愛おしさが溢れ出す。
「す……好きだよ穂乃花……」
気がつけば昨日何度も伝えた言葉を再び口にしていた。
「ば……馬鹿っ……」

ボッと音が出そうなほどの勢いで幼馴染みは顔を真っ赤に染める。

「そそそ……そんなこと今更言われなくたって、よく分かってるわよ！　その……私だって同じ気持ちなんだからっ!!」

穂乃花はチュッとこちらの頬にキスをしてきた。

押しつけられる唇の柔らかさに、全身がゾクゾクとしてしまう。当然のように肉棒は更に大きく、硬くなっていった。

「……また大きくなってる」

もちろん気付かれてしまう。

「あ……これは……」

「べ……別に言い訳なんかしなくていいわよ。その……ち、ちょっと来て……」

そう言うとお嬢様はこちらの手をグイッと引っ張ってきた。そのまま近くの公園――その中にある公衆トイレ（しかも女子の方）の中に連れ込まれてしまう。

「え？　ま……不味いって！　こっちは……」

「この時間帯にここを使う人なんかいないから気にしないでいいわよ。それより……このままお……おちんちんを硬くして街を歩く方が問題でしょ」

それは確かにそうかも知れない。けれどそれと女子トイレに入ることになんの関係があるのだろうか？

なんてことを疑問に思っていると、穂乃花はそれに答えるように個室トイレの壁に背中

を預けて立っている悠の前にしゃがみ込むと、躊躇うことなく制服ズボンと下着を脱がしてきた。
当然のようにビョンッと痛々しいほどに屹立した肉棒が剥き出しになる。
「やっぱり……大きいわね」
ゴクッと息を呑みながら幼馴染みは呟く。
「ほ……穂乃花？　一体何を？」
「何って……もちろん、このまま学校行くわけにはいかないから……あ、あああ、あんたをスッキリさせてあげるのよ。時間がないからその……え……エッチまではさせてあげられないけど、せめて口で気持ちよくしてあげようかなって……。その……えっと……こ、恋人としてそれくらいしてあげるのは当然なんだからっ!!」
そこまで言った後、少しだけ穂乃花は不安そうな表情を浮かべる。
「それとも……こういうのめ……迷惑？」
向けられる視線はなんだかいまにも泣きそうにさえ見えた。
「め……迷惑なんて……そんなことないよ!!　してもらいたい。してもらいたいよ」
「そう。それじゃあしてあげるわね」
ホッとしたような表情を浮かべつつ、本当に嬉しそうに彼女は笑った。
そして――
「んちゅっ」

昨日と同様再びペニスに口付けをしてきた。
もちろん一回だけでは終わらない。
「ちゅっちゅっちゅっ……んちゅっ……。んふうう……」
繰り返し何度も肉棒に口唇を押しつけてくる。
「はぁあああ……。凄い……。キスするたびにピクピク動いてる。これ……か、感じてるってことでいいのよね？」
唇の感触が伝わってくるたび跳ねるように震える肉棒の反応を見つめながら、上目遣いで尋ねてきた。これに対して悠は何度も頷く。
「よかったぁ。でも……この程度で満足するんじゃないわよ。本番は……はぁっはぁっ……ここからなんだからね！」
くっちゅ……。れろっ！　むっちゅ……。れろっれろっれろぉおお……。
嬉しそうな表情を浮かべつつ、幼馴染みはキスだけでなく舌をくねらせ始める。レロッレロッとアイスのように舐められる亀頭。カリ首を舌先でなぞりつつ、チュッチュッチュッと肉茎に口付けを繰り返してきた。
刺激を与えられるたびにムクムクと肉棒は肥大化していく。赤黒い肉先はいつ爆発してもおかしくないくらいの膨張っぷりだった。
それだけの愛撫によって、肉先秘裂からは先走り汁が溢れ出し始める。
「ふふ……。濡れてきた。それじゃあ……んっも……。もふううっ」

ぐぽっ……。ぬっじゅ……。ぐじゅうっ……。
舐めるだけでは終わらない。遂には口でペニスを咥えてきた。
「うあっ！　くっ！　凄い……絡みついてくる……」
口腔の温かな感触や舌の絡みつくような感触に、ねっとりと肉棒全体が包み込まれていく。咥えられているのはペニスだけ。だというのに、まるで全身が穂乃花に抱き締められているかのような気さえした。
「んふふ……しゅごくきもひよしゃそうね。れも……これくらいれまんじょくしちゃらめよ。本番はここかりゃなんらから……。んっぽ……。んじゅっぽ……。じゅっぽじゅっぽじゅっぽっ！」
咥えただけで終わりではない。
穂乃花はその綺麗な口を精一杯開いてペニスを咥え込みつつ、昨日もそうしたように顔を前後に振り始めた。
「くっ！　いい！　それ……いいよっ!!」
口唇で肉茎を擦り上げてくる。亀頭を舌で舐め回しつつ、ジュルルルッと下品な音を奏でながら、まるで精液を吸い出そうとするかのようにペニスを激しく吸引してきた。
ぬじゅっぽ！　ぐじゅっ！　じゅっぽじゅっぽじゅっぽっ！
下品な音が響くのも、ペニスを咥えた口端から唾液が零れ落ちるのも厭わない。ひたすら悠のペニスを愛撫してくる。

「凄い……。射精る！　これ……すぐに射精ちゃうよ」
別に凄い技術があるというわけではない。というよりも、明らかに幼馴染みの口奉仕は拙いものだと思う。それでも、穂乃花がしてくれている――その一点だけで、すぐに抑えがたいほどに射精衝動がわき上がってきた。
肉棒が震え、先程まで以上に亀頭が膨張していく。下腹部から全身に向かって広がってくる快楽の奔流に抗うことなどできそうになかった。
だが――
「んぽっ……。はぁっはぁっはぁっ……だ、駄目よ。まだ……これくらいで射精しちゃ駄目なんだから！」
射精直前で穂乃花の口戯は中断されてしまう。
「ど……どうして？」
絶頂直前で愛撫を止められたことで、耐えがたいほどのもどかしさに襲われる。反射的に幼馴染みに対して縋るような視線を向けてしまっていた。
「どうしてって……もちろん、もっとあんたを……その、き、気持ちよくさせてあげたいからよ。こんな口だけで満足なんかさせないんだからね！」
「それって……どういう意味？」
さっきエッチはさせないと言っていたが、やはりセックスさせてくれる気になったのだろうか？

疑問を抱きながら問うと、穂乃花は「こ……こういうことよ」などと言いつつ、制服の前ボタンを外し、白いレースのブラジャーを剥き出しにした。このブラジャーも少しだけ恥ずかしそうな表情を浮かべて躊躇いつつ、上側にずらす。途端にプルンッと上向き加減の形の美しい胸が露わとなった。

染み一つない白い乳房に、桃色の乳輪。そして、興奮しているのか勃起した乳首――。

それらが悠の視界に映る。

（凄く……綺麗だ……）

昨日も見たけれど、その完璧な胸の造形にはやはり見惚れてしまう。思わずゴクリッと生唾を呑んだ。

とはいえ、しかしなんでまた胸を剥き出しに？

「まだ分からないの？」

「う……うん」

興奮しすぎてまともに思考できない。そのせいで彼女の意図がさっぱり掴めなかった。

「察しが悪いわね……。こうするのよ！」

すると穂乃花はそんなことを言いながら、口奉仕によって唾液に塗れた屹立に露わにした胸を両手で掬うように寄せ――

「んくっ……あんっ」

そのままグニュッと肉槍を柔肉で挟み込んできた。

「うあああっ！」

柔らかな肉がペニスに吸い付く。ただそれだけ。それだけの行為でしかない。だというのに、膝が砕けてしまいそうなほどの愉悦を感じた。

「凄い……。私の胸の間でビクビクッて悠のおちんちん震えてる。どう？　これ……えっと、確かパイズリっていうのよね？　私の……ぱ……パイズリき、気持ちいい？」

「うん。い、いいよ……これ……す、凄くいい」

パイズリ。

幼馴染みの口からその単語が出るだけで、より射精衝動が高まっていくのを感じた。

「そう……。よかった……。で、でも、これだけで満足なんてしないでよね！　本当に気持ちいいのはここからなんだからっ!!」

ホッとしたような表情を最初は浮かべたが、すぐいつもの勝ち気な顔になると――

ぐっじゅっ！　じゅぐっじゅぐっじゅぐぅううう……。

「んっふ……。んっんっんんんっ」

ゆっくりとした動きではあるけれど上半身をくねらせ、乳房を使ってペニスを扱き始めた。

マシュマロの海に肉棒を突き込んでいるのではないか？　とさえ思えるほどに柔らかな感触が肉棒を擦り上げてくる。先程の唾液が潤滑剤となり、乳房の動きはとても滑らかなものだった。

上半身のくねりに合わせてグチュグチュという音色が響く。その音によって悠の興奮はより刺激され、再び射精衝動が膨れ上がってくるのを感じた。
「これ……んんんっ……あっあっ……大きくなってる。私の胸の……お……おっぱいの間で……はぁっはぁっはぁっ……悠のが……悠のおちんちんが大きくなってるのが分かる。感じてる。これ……感じてくれてるんだ。んっんっんんん」
増幅する射精感に比例するように、肉棒はこれまで以上に肥大化していく。胸の間のそんな肉槍を見つめながら、本当に嬉しそうな表情を幼馴染みは浮かべた。
「感じてる。感じてるよ。穂乃花の胸……おちんちんが溶けちゃいそうなくらいき……気持ちいいよ」
「そう……。んんん。嬉しい。悠が感じてくれて私も……嬉しいわ。なんか……あっあっ……私まで気持ちよくなってくるくらい。あっふ……あんんん。んっんっんんんん♥」
乳房とペニスが擦れ合う感触に性感を覚えているのだろうか？　ぐっちゅぐっちゅという動きに合わせて穂乃花の口からは甘い悲鳴が漏れる。脳髄にまで響くような甘い悲鳴だ。この声によって興奮がより煽り立てられていく。
「穂乃花！　好きだよ穂乃花っ!!」
幼馴染みに対する気持ちが溢れ出す。
気がつけば彼女の動きに合わせて自分からも腰を振ってしまっていた。
気持ちいい。本当に伝わってくる胸の感触が心地いい。乳房の柔らかく吸い付くような

穂乃花は悠と唇を重ね合わせる。

舌を互いの口腔に挿し込み、口内を貪るように蠢かせた。ロマンチックなキスとはいえない。肉と肉をまさぐるような貪欲なキスである。舌の動きに合わせて脳髄までかき混ぜられるような気分になる淫靡なキスだった。

（やっぱりキス……気持ちいい……）

強がることも忘れて、そんなことを考えてしまう。

ジンッジンッジンッと、口付けに合わせて自分でも驚くぐらいに秘部が発熱していくのを感じた。

したい。悠としたい。エッチなことを……セックスをしたい……。

キスだけで頭の中はそんな感情に満たされてしまう。

（ち……違う。違うわ……。えっと……これはその、いまはもう日課みたいなものだから。お昼の後エッチするって、いつものことだから……。別にしたくてするわけじゃない。だけど……その……呪いのせいだから……）

それでもまだ残っている理性で言い訳のように繰り返すものの、明らかに最初の頃に比べると意思の力は弱々しいものとなっていた。

「ねぇ……悠」

「分かってる。僕もしたい……」

自分からセックスをねだるような言葉と視線を向けてしまう。

これに幼馴染みは頷き、こちらの股間部に手を伸ばしてきた。スパッツの上から秘部を撫で回してくる。ゆっくりとした動きで秘裂を上下に擦り上げてきた。

「んっく！　あっ！　んっんっ……あんんっ」

ほんの少し撫でられただけでしかない。けれどもそれで十分だった。すぐに穂乃花の口からは甘い悲鳴が漏れる。指の動きに合わせるようにビクッビクッと肢体が震え始めた。

ぐちゅっ！　ぬっちゅ……。くちゅっくちゅっくちゅっ……。

当然のように愛液も分泌される。溢れ出した女蜜がスパッツに染み込み、指の動きに合わせて淫猥な音色を奏で始めた。

「もうこんなに濡れてるよ……」

濡れた指先を見せつけるように突き出してくる。

（ば……馬鹿っ！　そんな恥ずかしいことしないでよっ！　それは違う……。違うのよ！）

何が違うのか？　自分でもさっぱり理解できない。それに、もう分かりきったことではあるけれど、心の中でどう思おうが――

「し……仕方ないじゃない！　悠に……悠に触られたら……私……それだけで感じちゃうんだから！　すぐに……悠のおちんちんがすぐに欲しくなっちゃうんだから!!」

結果はこれである。

「だから……して……お願い……挿入れて……」

悠を求めながら膝立ちになると、近くにあった跳び箱に上半身を預けつつ、腰を悠に向

かって突き出した。その状態でスパッツとその下に穿いていたサポーターを自分の手で太股の辺りまでズリ下げる。スパッツと秘部の間に愛液の糸を伸ばしながら、張りのあるヒップとぱっくり開いた花弁を自ら幼馴染みの前で露わにした。

「ねぇ……お願い。ちょうだい……悠のを私に♥」

腰をフリッフリッと左右に振って悠を求める。あまりに恥ずかしすぎる行動だった。

けれども羞恥を抱いたところで行為を止めることはできない。

（別にしたいわけじゃないわ。だだだ……だけど、自分じゃどうすることもできないんだから……。もう仕方ないじゃない。こんな恥ずかしい姿をずっと長い時間晒すくらいなら……は、早く終わらせた方がいいわよ！　だからその……は……早く挿入れて！　挿入れなさいよねっ!!）

心の中でも悠を求める。

あくまでもそうするしかないから仕方なくというスタンスで……。

なのに、どうしてだろう？

仕方なくのはずなのに、本当はしたくないはずなのに――

「それじゃあ挿入れるね」

悠が剥き出しにしたペニスが近づいてくるのを見ていると、心臓が高鳴ってしまう。肉棒を求めるように秘部を疼かせてしまう。

「はぁはぁ……」

自然と息も荒くなっていった。
ぐちゅっ！　ぬっじゅっ……。じゅぶううっ！
「あっあっ！　き……来た♥　挿入ってきた……。悠のが……んんんん……わ……私の……はぁっはぁっ……膣中に来たぁああ♥」
本能のままに繋がりあう。
（あああ。広がる。私の膣中に悠のが広がってくる。なんかこれ……んっんっ……わ、私の中の……た……足りなかった部分を満たされていくみたい。こんなこと……あんんん……ほ、ホントは……したくないはずなのに……こっれ……か……感じちゃう）
途端に下腹部がペニスの熱気で満たされていくのを感じた。こんなこと本当はしたくないはずなのに、否定できないほどの性感を覚えてしまう。
「気持ちいい。悠のおちんちん……すごく気持ちいい♥」
当然のように性感を認める言葉を口にしてしまう自分がいた。
「僕もだよ。僕もいいよ！」
「動いて！　ねぇ……お願い。動いて！　私の……あっあっ……な、膣中を……悠ので滅茶苦茶にしてぇ♥」
貪欲なまでに快楽を欲してしまう。
「分かってる。いくよっ!!」
これに悠は答えてくれる。

ぐっじゅっ！　ずじゅぶっ！　じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ！
肉壺を刺し貫こうとしているのではないかとさえ思えるほどの勢いで、膣奥まで繰り返し腰を突き込んできた。
「んひぁっ！　あっあっ……い、いい♥　やっぱり気持ちいい！　悠のおちんちんいいのぉ♥　あああ！　すごい。もっと……もっと動いて！　私の膣中を……んっふ……あううう……はぁはぁ……ぐ……グチャグチャにして！」
いまのピストンだけでも十分に心地いい。だというのに、更なる快楽を欲してしまう。ただ言葉で求めるだけではない。結合したまま、より深くまで肉棒を受け入れようとするように自分からも腰を振り始めてしまう。
パンッパンッパンッパンッ！
まるで発情した獣のように、互いに腰をぶつけ合った。
（あああ……。これ……気持ちよすぎる。だっめ……が、我慢できない。すぐ……こんなの……す、ぐに……ああ……絶頂く。い……絶頂っちゃう。耐え……ら、れないぃ♥）
数度腰を振るだけで、すぐに達してしまいそうなくらいに性感が増幅する。
「絶頂く……悠。私……絶頂っく……絶頂っちゃう」
その事実を幼馴染みに伝える。
すると彼は穂乃花を絶頂させようとするように、グラインドをより大きく激しいものに変えてきた。

（当たる。深いところまで当たってる！　絶頂く……もう……ほ、本当に絶頂っくぅ）
絶頂感をもう抑えることができない。膨れ上がる快楽にお嬢様は身を任せる。
だが、ちょうどそのタイミングで――
「えっと、ポールポール！」
二人の女生徒が体育倉庫の中に入ってきた。
「――んんんっ⁉」
慌てて穂乃花は自分の口を押さえる。悠も驚いたような表情を浮かべると、腰の動きを止めた。
（嘘……こんな……こんなことって……）
一応跳び箱の後ろに隠れているお陰で、二人はこちらに気付いてはいない。しかし、いつ気付かれてしまってもまったくおかしくない状況だった。
ドクッドクッドクッ！
心臓が爆発しそうなくらいに鼓動する。
もしこんな姿を見られてしまったら――。
（無理……。無理よ！　私……もう学校に来れなくなっちゃう。恥ずかしすぎる‼）
想像するだけで頭がどうにかなってしまいそうなほどに羞恥を覚えた。
気付かれてはならない絶対に……。
「……どこだっけ？」

「その辺りじゃなかった？」
会話をする二人に自分達の存在を悟られぬよう、必死に息を殺した。
しかし、そうして静かにしようしようと思えば思うほど、何故か肉壺に挿入されたままのペニスを意識してしまう。挿し込まれたまま動かない肉棒のドクッドクッという脈動を感じてしまう。
絶頂直前で止められたせいだろうか？　なんだかとてももどかしい気分になってしまっていた。
自然と太股同士を擦り合わせるような動作を取ってしまう。結合部からはジュワリジュワリッと愛液が止まることなく溢れ出す。
（ば……馬鹿っ！　変なこと……変なこと考えるんじゃないわよ！　どういう状況か分かってるの？　こんなの気付かれたら終わりなのよ！　だから……馬鹿げた考えをしちゃ駄目よぉっ！）
気持ちよくなりたい。動いて欲しい。肉壺をペニスでかき混ぜてもらいたい――生まれ出るそんな考えを必死に抑え込もうとする。
だが、そんな自分自身を嘲笑うように――
ぐちゅっ！　にゅじゅっ！　ぐじゅっぐじゅっ……ぐじゅううっ！
「んっふ……んっ……くふっ……ふっふっ……んふううっ」
自分から悠を促すように腰を振り始めてしまう。

「ほ……穂乃花？」
驚いたような表情を幼馴染みが向けてきた。
「し……して……。お願い……はぁはぁ……が、我慢できないの」
そんな彼に求めてしまう。
（違う！　違う違う違う！　そそそそ、そんなこと思ってない！　いましたら駄目！　駄目なの！　あああ、あんただって分かるでしょ⁉　分かるわよねっ‼　だから、今は！）
などと思っても、言葉にできなければなんの意味もなかった。
「分かったよ。穂乃花……声……我慢してね」
（我慢してねじゃな――）
いわよ！　と考えようとした次の刹那――
ぐっじゅ！　じゅぶぶっ！　じゅぼっじゅぼっじゅぼおおっ！
「んっふうう！　むふっ！　ふっふっ……んふううっ」
（うごっ！　あっあっ……動いてる！　ばっか！　こんな……近くに……いるのに……。あああ！　なに……何動いてるのよぉっ‼）
腰が動き始める。
先程のように大きく、激しい動きではなく、女生徒達に気付かれぬように実にゆっくりとした動きだった。
それでも――

（あああ。うっそ！　これ……んっんっんんん！　か、感じる。私……あっあっ……感じちゃう♥　こんな……人がいるのに……気持ちよくなっちゃうぅ）

先程絶頂直前まで押し上げられた肉体は、あっさりと性感を覚えてしまう。腰の動きに合わせて、目の前が真っ白に染まるほどに……。

「んふぅうう！　むふうっ！　くふっ！　あっ……んんん」

自然嬌声も漏れ出そうになってしまう。しかし、声を出せば確実に気付かれる。それだけは避けねばならなかった。そしてそれは鬼巫女曰く〝本音〟もそう思っているらしく、必死に声を抑えようと努める。

（でも……無理。き……気持ちよすぎて……あっあっ……我慢なんかできない）

だが、与えられる性感は想像以上に大きかった。

「あっふ……んふっ！　あふあっ！」

どうしても声が漏れてしまう。

「え？　いまなんか聞こえた？」

「……気のせいでしょ？」

なんとか気付かれてはいないようだ。しかし――

「あっ！　く……んひんっ！」

突き込みのたびにどうしても声が漏れてしまう。

（駄目！　もう……もう駄目ぇええっ！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!